

能動性の観点からみたクライアントの自己工夫

名 島 潤 慈

The Client's Strategies for Coping with His Undesirable Life Events
from the Viewpoint of Activeness

Junji NAJIMA

(Received September 28, 2001)

A male freshman in high school, who had been a dutiful and hurried child, came into weekly therapy. His problems ostensibly started after he was six months into the tenth grade in 1980s, when he stayed home from school with a headache and stomach ache, and then refused to go to a public high school after that. Instead, he watched television and listened to music. Both of his parents were deeply distressed and ashamed of his nonattendance, and reluctantly let him go to a psychotherapist when they were so advised. The main issue that emerged in sessions was his subterranean struggle with his mother over his schooling, who had ruled out a private school he wanted to go to with his friends. After a lot of difficult twists and turns, accepting his parents' offer, he finally transferred to another private high school located in another prefecture. In short, he could manage to find a way out of his troubles. In the paper, the author, who had related to him in an empathic manner with little advice or interpretation, examined the ways and means to cope with psychological obstacles created by his overbearing mother.

Key words: activeness, countermeasures, constructive use of coping strategies, circumspectness

I 本稿のねらい

筆者は心理療法の目標を能動性の育成と回復に置いているが、臨床場面においては、セラピストが特に助言したわけでもないのに、クライアントが自ら工夫して難局を切り抜けるといったことがよく見られる。これはおそらく、セラピストとの関係性のなかでクライアントの能動性が回復ないし増大していったためであろう。

本稿で取り上げる事例は、初回面接時高校1年生であった男子不登校生徒である。クライエン

ト（以下、CIと略）が面接当初に報告してくれた「仕方なく戦争に行つて撃たれて死ぬ夢」の意義は、既に別のところで吟味してある（名島、1982）。なお、このCIとの面接過程の前半部分については、ニューヨークのNPAP（National Psychological Association for Psychoanalysis）所属のAlan Rolandのスーパーヴィジョンを受けたが、このケースについてのRolandの最終的な見解は、彼の著作である*In Search of Self in India and Japan*（Roland, 1988）のなかの140-143ページに記されている。すなわち、Rolandによれば、①「父親の不在」によって強化された共生関係、つまり「わが子の内的な世界に対して共感を示さないような母親と子どもとの共生関係（a mother-child symbiotic relationship in which the mother is unempathic with the child's inner world）」が根底にあり、問題の中核は、攻撃的かつ支配的であった母親の「母性的共感の欠如（the lack of maternal empathy）」である。②日本人の内的評価はつねに、「われわれ自己（a we-self）」と結びついている。このCIは、学校に行かないことによって両親の内的評価を傷つけた。

ところで、以上のようなRolandの指摘は大変興味深いものであるが、ただ、彼の見方はあくまでも母子間の共生関係や日本的な自己評価のありかたに重点が置かれすぎていて、危機状況においてこのCIがどのような対処方策をとったのかという視点は、ほとんど触れられていない。もっとも、セラピストであった筆者自身もCIとの面接を行っていた当時は、特に意識してこのような視点からCIを見ていたわけではなかったのであるが。

以下、本稿ではもっぱら、母親との心理戦争におけるCIなりの工夫の仕方という点に焦点をあてて面接過程を再吟味してみたい。なお、「」内はCIの言葉、< >は筆者（以下、Thと略）の言葉である。

II 面接経過中に見られた工夫

CIは、中学卒業後は友人たちが行く予定の地元の私立高校に進学したかったが、母親の強い勧めによって郡部の公立高校に進学した。しかし、級友とのトラブルがあり、登校時間帯の頭痛や腹痛によって高校1年生の2学期から学校を休みがちとなり（身体症状の発現によるトラブルの回避）、翌年の1月から完全不登校状態となった。CIは親に連れられて県内外の合計3つの病院で医師の診察（脳波検査を含む）を受けたが、特に異常はなかった。家での生活形態は、テレビを見たり小説を読んだり、音楽を聴いたりといったものであった。医師による向精神薬の投与はまったくなされなかった。なお、仕事熱心な父親はCIにとっては遠い存在であり、母親は、CIにとっては「一番親しみを感じるが、口うるさい」存在であった。

筆者との面接は、高校1年生の冬から対面法で約1年間行われた。CIは当初から転校したいという希望を有していたが、最終的にCIが県外の私立高校に転学となったことで面接は終了した。Thは、面接中はCIが物語る悩みや葛藤を傾聴・整理・明確化するだけにとどめ、具体的な助言は一切しなかった。このような面接経過のなかで見られたCIなりの工夫、つまり葛藤との

折り合いのつけ方は、以下のようなものであった。

1 母親への抵抗とサービス

Thとの面接が開始されてまもなく、Clは「県外に出るのは早いほうがいい」という転校への希望と、それにまつわる葛藤を表明した。葛藤というのは、「親の指図というか、親がいると判断できない」「親に頼っていると1人で物事を判断できない」「母親に頼っていて甘えがある」ので1人で県外へ出て生活してみたいが、しかし、県外へ出ることは「今の状況から逃げ出すという感じもする」というものであった。(県外への転校に関しては、Clによれば、母親は反対であり、父親は、「今の高校を卒業してから県外に出ることを考えたらいい」という意見であった。)

さて、1年留年となったClは「今行かないと一生を棒に振る」「1週間連続して登校したら転校してもよい」などと母親に言われ、4月の新学期が始まってから入学式も含めて数日間登校するが、途中で発熱してダウン。以後も断続的に休んだり登校したりしていたが、それでも母親との約束をあてにしてClは5月の中旬、1週間連続登校した。これに対して母親は、「あれは4月の時点での約束だ」と合理化した。Clとしては、「何かベテンにかけられたみたい」。そこでClは、5月の下旬から再び不登校となった。もっとも、このたびのは完全不登校ではなくて、Clは時々登校した。Clによれば、登校しないのは約束を破った母親に対する「抵抗」であり、それでも時折登校するのは、自分のことを心配してくれている母親への「サービス」であった。このころClは、「両親と一緒にいると、自分の意志力が伸びないので県外へと思う」「親がどうしても（心のなかに）乗り込んでくる。自分の意志がはっきりしないのが弱み」「自分としては（高校を）やめることに未練はないが、ただ、両親が心配しているのでやめていいものかどうか」と述べていた。

2 クライアントなりの妥協策

6月の下旬、Clは担任の勧めで音楽関係のクラブに入部し、7月からは登校する日が増えた。もともとClは音楽好きであったが、Clにすれば、「何か目標を見つけて、それで自分を支えるのを求めている」とのことであった。そしてClは、夏休みも登校して音楽の練習に励んだ。それと同時にClは、家では少しずつ問題集をやるようになった。これは、音楽ではなくて勉強のほうを望んでいる母親をなだめるためのClなりの妥協策であった。実際母親は、「朝は早く起きろとか、勉強しろとしょっちゅう言う」(Clの言葉)といった状態であった。

ところで、上述の妥協策は一時的に有効であっただけで、9月に入ると「親に無理に学校に行かされている」という反発心が出てきた。もっとも、そう言いつつも、Clは相変わらず学校に通い、ますます音楽に傾倒していた。

3 再度の抵抗と提案

しかしながら、11月の文化祭で皆と音楽の演奏を行った後、「学校が自分自身のことなのか両親のことなのか、はっきりしない」という以前から持ち越してきた疑問が再び生じ、CIは再び不登校ぎみとなり、翌年の1月に入ると、またもや完全不登校となった。これはCIによれば、再度留年しないで進級することのほうを望む母親に対する抵抗であった。CI自身としては、もしも進級できなかったらそのまま留年したくない、今の高校をやめて市内の定時制高校に行きたいという気持ちであった。そしてCIは、この定時制高校への転学の希望をはっきりと両親に伝えた。しかし両親は、定時制高校は卒業までに4年間かかるということで反対であったという。

4 慎重な追従

ところが2月に入ると母親から、A県のB私立高校に転校しないかという話が不意にCIに持ちかけられた。CIとしては、「狐につままれた感じ。自分としては進級できないときには県外をと考えていなかった。で、突然言われてびっくり」であった。

CIからみれば、母親の戦略は二段構えであった。1つは、もともとCIが意思表示していた他県への転校を親のほうから持ち出すことによってCIの定時制高校への希望をうち消す。もう1つは、もしも転校の話が不首尾に終われば、そのまま今の高校を継続させる。

CIにすれば、母親が転校先の高校の名前その他をいっさい知らせてくれないのもう1つ意欲が湧かないが、その反面、転校すれば親から離れることができるという利点があった。

転校にはもう1つ意欲が湧かないとはいうものの、CIの態度はこれまでのような受動的なものではなかった。2月末にThが、<去年の3月、あなたは仕方なく戦場に行き、最後は撃たれて死んでしまうという夢を報告してくれましたね。あのときの状況と比べると、今はいかがですか？>と尋ねると、CIは、「今度はちょっと違う。去年は知らないあいだにドンパチやっていて弾にあたったという感じだった。今度はちょっと積極的。自分のほうからも攻めていくような感じ。去年は1週間行けば県外という形だったが、それがおじゃんになって……。今回の場合、向こうから降ってきた話。自分も警戒しながら話の進み具合を見ている感じ。要するに、すんなり向こうの戦略にはまるのではなくて、じわじわ手を出すという感じ。<今回は用意ができています？>そう。準備なしにという形じゃなくて、ある程度態勢を整えている形」と述べた。

CIは結局、3月下旬に父親に連れられてA県のB高校の面接試験に行き、その1週間後には母親に連れられて筆記試験を受けた。結果は合格であった。しかしCIは、自分が転校するというのに1年生の新入生となるのか、それとも2年生に編入されるのかを知らなかった。つまりCIは、親に直接聞いて確認しようとはしなかった。なぜなら、正面切って親に聞くことは危険であった。つまり、「(親と)対決すると、もしかして心理的により親しくなるかも。しかしまた、決定的に離れるかも」ということであった。

母親からの分離不安と、母親からの自立への欲求との間で揺れ動いていたCIとしては、「県外

への転校」という一番最初の希望が叶えられた以上、ことを曖昧にして、流れに任せておくのが最も安全かつ慎重なやり方であったといえよう。

5 転校による分離

結局 CI は、4月にB高校の1年生となって県外に転校した。後の母親の話によれば、CIは大学生や高校生たちと一緒にのところで下宿生活を送っており、以前よりもたくましくなった、親元にはめったに帰って来ないとのことであった。

Ⅲ 考 察

1 母親に対する対処法について

青年期における対人関係、それも特に母子関係においては、母親と青年との間でさまざまな利害が対立しあう。特に、母親はわが子を児童期と同様に統制しようとし、青年は母親の支配下から脱しようとする。しかし、自分の手でいまだ生活費や教育費を稼ぎ出せない青年にとっては、母親に対する対抗手段は限定されてくる。しかも、多くの場合、父親は母親の側に立つ。自我発達の側面からみても、青年がそれまで内在化させていた親的な自我の支えから離脱していくことは、青年の自我を一時的に弱体化させるものである(Blos, 1967)。

このような状況下における能動性とは、自分と母親の利害を積極的に調整していくような心の動きであるといえよう。さらにはまた、自分と母親のみならず、自分の心のなかにある自立性への欲求と依存性への欲求という2つの相反するものを自ら調整していくような働きであるといえよう。比喩的に言えば、「離れつつ依存する」ないし「依存しつつ離れる」ような自己調節的な動きである。

本稿のCIはさまざまな紆余曲折を経て、最終的には県外の私立高校に転校した。「公立」高校をやめて「私立」高校に転校することによって母親の期待をうち砕いたが、同時に、「定時制」高校ではなくて「全日制」高校を選んだという点で母親の期待に添ったのである。

2 面接場面におけるセラピストの動きについて

ThはCIとの面接場面では、もっぱらCIの話すことに傾聴したり、CIの話を整理したり、CIの不安や感情を明確化したり、よく分からない点を質問したりしたが、CIの不登校の原因論的な側面には特に焦点をあてなかった。また、母親への対処についての具体的な助言は何も行わなかった。Thが行ったのは、CIの回復をひそかに期待しつつ、傾聴・整理・明確化・質問といった介入法によってもっぱらクライアントの心の揺れに沿っていっただけである。

3 セラピストークライアント関係について

CIは面接を連絡なしに欠席することはほとんどなかったものの、しばしば面接予定時刻に遅

刻した。彼の最大の遅れは50分であった。Clが50分も遅刻したときには、Thは次の予定もあってわずか5分間しかClと話せなかった。

あまりにも遅刻の回数が多いので、Thは最初の年の8月に、くもともとあなたは、最初はお母さんに連れられて私のところにやってきた。ひょっとして、ここに来るのは義務感からですか?と質問してみた。するとClは、「いやあ、そうではないが。来ると落ち着く。学校とも違う何かがある。それが自分のためにもなるよう」とだけ述べた。

先述のRoland (1988) は、このClはThとの治療関係を「自由駐車 (free parking)」として利用したと述べているが、言い得て妙である。彼の比喩を借りれば、Thのいる面接室はClにとって一種の駐車場であったと言える。必要なときに必要なだけ車をとめ、用事が済めばまた出ていくわけである。母親から統制されることに極度に警戒的であったClは、母親に紹介されたThに対しても警戒的であったといえよう。Thという重要な他者に対して「一定の距離を取りつつ接近する」、言い換えれば、「面接予定時刻に大幅に遅刻することによって面接時間そのものを極端に短くするが、それでも自分自身のために来談しつづける」という関係の持ち方は、Clなりの1つの工夫であったと言えるかもしれない。

IV おわりに

心理療法におけるセラピスト-クライアント関係は、一種独特の人間関係である。そこでは以前から指摘されてきたように、転移と逆転移が種々交錯する。しかしながら、セラピスト-クライアント関係においてクライアントの転移が花開くのは、もともとセラピストが転移の開花と発展を期待しているからでもある。伝統的な用語で言えば、起源神経症 (original neurosis) を転移神経症 (transference neurosis) に転化させることが治療操作上必要不可欠となるからである。

セラピストが転移ではなくて、クライアントの能動性の回復に焦点をあてた場合には事情が少し異なってくる。つまり、セラピストはできるだけクライアントに対して非侵襲的態度を取り、クライアントの心の動きに沿っていく。その場合、クライアントの動き方を、生活場面における困難な状況に対するクライアントなりの対処の仕方という観点からみていくことになる。

筆者は本稿において、筆者が昔関わったことのあるクライアントとの面接経過を、能動性という観点から再吟味してみた。その結果、生活場面におけるクライアントの動きはクライアントなりの自己工夫の産物であり、セラピストの役割はそのようなさまざまな工夫の発現と推移を静かに見守ることが大切ではないかということが示唆された。

引用文献

Bloss, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.

名島潤慈 1982 インテーク面接における夢の臨床的意義について—登校拒否の1症例 熊本大

学教育学部紀要, 人文科学, 31, 241-249.

Roland, A. 1988 *In search of self in India and Japan: Toward a cross-cultural psychology*. New Jersey: Princeton University Press.